

朝日新聞（八月一六日）週刊読売（八月二五日号）東京新聞（八月二日）東京中日新聞（八月二四日）
日本経済新聞（八月二五日）週刊新潮（九月二日号）等の書評欄で激賞をうけた書物です。

日本図書館協会選定図書

猪間驥一著「人生の渡し場」

フランス装
価 二八〇円
二五円



〆渡船に乗って川を越そうとしている老人がある。何十年前に彼は二人の親友と連れ立って同じ渡しを渡つたことがあつた。老人のまぶたの裏には、なつかしい亡友の面影が数々の思い出につれて浮かんでくる——やがて船は向岸につく。老人は渡し賃を払う。
三人分の渡し賃——「船頭さん、それだけ取つて

おいておくれ。お前さんには客は一人として見えなかつたろうが、わたしは友達二人と一緒にのもりだつたのだから」と老人は言つた。

を求め
つた教授は、
た。老教授の胸に
た悲痛が秘められていた。感動した多くの人が、こ
れがドイツの詩人ウーランドの詩であることを教える……昨秋広い社会に清新な佳話として伝えられた
哀切な話題……この話題に筆を起こして猪間教授
は、その诗情と道義感をたたえたあふるる思いを数
々の文章に語る。

みずからを「人生の渡し場」に舟こぐ船頭に比し、
川を渡る若人とその父と母とに語りかけようとす
る。詩あり、歌曲あり、助言あり、秘話あり、書翰
あり、演述あり、波瀾多き人生経験を経、悲痛の限
りを嘗めつくして、世の裏を語りつつ、青春の純情
を失わず、不正と戦う闘志を秘めつつ、全篇愛情を
以て貫ぬぎ、笑いの中に涙あり、悲哀の中に朗かさ
をたたえた、他に類するものなき珠玉の短篇集。
新進の閨秀画家、朝倉拱さんの丹青をこめた装幀に
映える内容の概目は下記の通りである。

詩「渡し場」

胸奥の詩とまぶたの詩
子供への詩論
学園・学生・卒業生
入学試験三題
私大入試打明け話
父兄は御用心
国立大学入試奇譚
入学試験に落ちた学生へ
愛読書

内容なる主

石橋湛山さんとクラーク博士
アルバイトについて
学生就職についての依頼状
試験とカンニング
卒業生への手紙三通
大学講師となる若い学者へ
婦人の法学士へ
会社員になつた卒業生へ
結婚披露の席上で
師と友と
一つのネクロロジ
「亡き子」を公表するについて
亡き子 I

東京神田局内鎌倉町1の1
振替 東京 78970

三 芽 書 房 刊